

きみの友だち

2008(平成20)年6月3日鑑賞〈東映試写室〉

★★★



監督＝廣木隆一／原作＝重松清『きみの友だち』（新潮社刊）／出演＝石橋杏奈／田村有理／北浦愛／沓澤万莉／吉高由里子／福士誠治／森田直幸／山田健太／木村耕二／柄本時生／華恵／中村麻美／大森南朋／柄本明／田口トモロヲ／宮崎美子（ビタース・エンド配給／2008年日本映画／125分）

……重松清は「痛みと喪失、再生と希望」を描き続ける人気作家。松葉杖の少女を主人公とした、中・高校生向き「ともだち論」のテーマもこれ！ 団塊世代には大人向け「ともだち論」のフランス映画『ぼくの大切なともだち』（06年）がピッタリだが、思春期の諸君や青春真っ只中のあなたには、この映画による「ともだちチェック」がピッタリ……？ なお、「ともだち論」の大切な小道具である「もこもこ雲」に注目！

日仏の「ともだち論」比較……？

5月2日に観た『ぼくの大切なともだち』（06年）は大人の「ともだち論」が展開される興味深いフランス映画だった。その重要な小道具は、『トロイ』（04年）に登場したアキレスとパトロクルスの友情を示す「親友の死を嘆いた男がこの壺に涙を溜めて墓に安置した」という壺。「親友はいる？ 誰なの？」との質問に対して、ムキになって「賭けるか？」と挑発した主人公は、賭けのためにたった1つの友情を失うことになるのだが……？

そんなおしゃれで風刺に富んだフランス版の「ともだち論」に対して、『きみの友だち』は日本の中・高校生たちの「ともだち論」。交通事故の後遺症のため松葉杖を余儀なくされた少女和泉恵美（田村有理、石原杏奈）と、その同級生である病弱な少女楠原由香（沓澤万莉、北浦愛）との友情を軸として、その周囲の中・高校生たちのともだちにまつわる物語が次々と……。したがって、現在思春期真っ盛りの諸君には必見の映画かもしれないが、団塊世代のおじさんたちにはこの手の映画は少し苦手……？

テーマは「痛みと喪失」そして「再生と希望」

この映画の原作は、重松清の同名小説。直木賞作家重松清は、「痛みと喪失」「再生と希望」を描き続ける人気作家とのことだが、例によって私はこの手の小説は1度も読んだことがない。

主人公の恵美もその親友の由香も、身体に障害を持った少女。また、親友がボーイフレンドに熱をあげているため、「心因性視力障害」になってしまうのが、恵美の同級生の花井ハナ（吉高由里子）。他方、恵美の弟ブン（森田直幸）やその親友の中西くん（山田健太）は、勉強もサッカーもよくできるクラスの人気者だが、今やこの2人と完全に差がついてしまった幼なじみの三好（木村耕二）や、サッカー部の万年補欠だった1年先輩の佐藤（柄本時生）は2人とも落ちこぼれ。

重松文学はそんな中・高校生の障害者や落ちこぼれの「痛みと喪失」をやさしく見つめつつ、「再生と希望」を描いているから大人気……？

14歳の石原杏奈が20歳の恵美を！ そりゃ、ちょっと……？

中学3年生、14歳の恵美を演ずるのは映画初出演・初主演となった石原杏奈。1992年生まれ彼女の彼女は、撮影時14歳だったから、その役はピッタリだが、何と彼女は20歳になった恵美も1人で演じている。プレスシートにある廣木隆一監督のインタビューでも、「14歳だった石原杏奈が20歳の恵美を演ずるのは大変だったと思う」旨の発言があるが、私にはその違和感がすごく大きかった。

それを増幅したのが、同級生のハナを1988年生まれの吉高由里子が演じていること。もちろん、吉高由里子も14歳になりきろうとしているのだが、誰がどう見ても実年齢14歳の石原杏奈と、大人びた顔立ちの吉高由里子が同級生には思えない……？

ちなみに、この吉高由里子は6月9日観ることになっている、金原ひとみの原作を蜷川幸雄が監督・脚本した『蛇にピアス』（08年）に初主演！ そのここではもちろんヌードも披露するはず（？）だから、19歳の美女吉高由里子がどんな演技を見せてくれるか大いに楽しみ……。

話がそれってしまったが、恵美がぶっきらぼうなしゃべり方をするのは、小学4年生、10歳の時の交通事故のせいかもしれないが、いくらぶっきらぼうなしゃべり方によって20歳の恵美を演じようとしても、やはりそこにはかなりムリがある。ましてや、相

変わらず松葉杖をつきながら、フリースクールで子供たちに絵を教えている恵美は今20歳になっているが、取材でそこを訪れていたジャーナリストの中原(福士誠治)と結婚することになるのだから、そんな演技は14歳の石原杏奈にはちょっと背伸びしすぎ。

廣木隆一監督による、中・高校生たちのともだち論の描き方には別に異論はないが、やはり14歳の石原杏奈が20歳の恵美を演ずるのはちょっと……？

日本版「ともだち論」の重要な小道具は、「もこもこ雲」

フランス版の大人向け「ともだち論」の重要な小道具は友情を象徴する壺だったが、日本版の中・高校生向け「ともだち論」の重要な小道具は、「もこもこ雲」。由香は13歳の誕生日を病院のベッドの上ながらも、父親(田口トモロヲ)、母親(宮崎美子)そして親友の恵美から祝ってもらったが、翌年恵美が高校を受験する日には、とうとう由香は天国へ召されてしまうことに。

20歳になりフリースクールで働いている恵美はそこで「もこちゃん先生」と呼ばれていたが、それは彼女が雲の写真を撮るのが大好きだから。なぜ恵美が空に浮かんでいるあの雲が好きなのかはかなり哲学的(?)だから、あなた自身の目で確認してもらいたい。そんな恵美が由香の13歳の誕生日にプレゼントしたのが、自分で描いた「もこもこ雲」の絵。由香が宝物のようにしていたこの絵がこの映画で展開される「ともだち論」の大切な小道具として使われるから、要注目！ それにしても、「もこもこ雲」とは、何とも言い得て妙！

2008(平成20)年6月4日記